

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：32414

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885067

研究課題名(和文)都市の「遊び空間」と「子ども」をめぐる規範形成とゆらぎに関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) Study of Historical Sociology of Formation of Norm and Fluctuation about Children and 'Void' of City

研究代表者

高久 聡司 (TAKAKU, Satoshi)

目白大学・社会学部・専任講師

研究者番号：60711439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の研究成果から明らかになった点は以下の通りである。第1に、「子どものため」という語り方は、社会的背景に影響を受けるだけでなく、それを規定要因としながらも、校庭や公園など、空間の特性に応じて、何が「望ましい」のかが変容することである。それゆえに第2に、都市空間はその空間が置かれる状況における「望ましさ」にもとづいて創出されるものの、私たちの空間へのまなざしにゆらぎが生じるため、さまざまな論争が生じることである。

研究成果の概要(英文)：The main result of this study can be summarized as follows. Firstly, the desirability of narrative of "for children" transforms depending on a characteristic of the space including school grounds and the park while not only being affected by the social background, but also doing it with a rule factor. Secondly, that is why it is what "politics" produce because a fluctuation occurs in the look to our space although it is created based on "desirability" in the situation that the space is put in the city space.

研究分野：社会学、都市社会学

キーワード：子どもと社会 都市政策・都市空間 公共性

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初の背景は、研究代表者がこれまでに行ってきた学校校庭をめぐる研究から見出された「子どものため」という語り方に潜む問題点をさらに追求するという点、都市空間を対象とする社会学の主眼が「消費」に置かれており、それゆえに看過されがちであった「遊び空間」それ自体が有している意味を捉え直すという点に求められる。以下、それぞれについて、詳述する。

(1) 学校校庭と「子どものため」という語り方

本研究は、研究代表者が学位論文にて行なってきた、学校校庭をめぐる行政と市民の歴史社会学的研究に着想を得ている。それは、「子どものため」の空間である校庭のあり方をめぐる論争の歴史が、「子どものため」という言葉に巧みに大人の論理（経済的であるべき、塵埃飛散は生活環境に悪影響など）を忍び込ませた結果として生じる、せめぎ合いの歴史であることを見出した点に由来する。そして、そこから日本社会における空間や「子ども」へのまなざしの変容を理解し、学校校庭は教育空間のみならず、都市の論理が染み付いた空間であるという視点を見出したことによる。本研究は、これまでの研究を踏まえ、学校校庭のみならず、都市の公園などの「遊び空間」も対象として、空間をめぐる行政と市民の論争 ポリティクス の解明を発展的に展開させることを目的とした。

(2) 都市空間をめぐる社会学との関連

郊外都市の均質な消費空間化やそれに伴う都市の無個性化は、しばしば否定的に語られてきた(三浦, 2004)。だが、近年そのような否定的に語られてしまう都市の風景を肯定的に捉え直す社会学的検討もなされている(東・北田, 2007; 若林, 2007)。そこで着目されるのは、幼少期の原体験や郷愁であり、無個性と呼ばれてしまう空間に潜む多様性である。しかし、これらの研究が焦点を置くのは、「消費」を軸とした機能的空間である。私たちが生活する都市空間は、そういった機能的空間ばかりではなく、建築家レム・コールハース(1998)の言葉を借りれば、公園や空き地、原っぱといった一見すれば機能的ではない「遊び空間」(void)からも成り立っている。だが、それらの空間は、「遊び空間」であるためか、比較的容易に取り壊され、消費空間へと変容したり、管理を徹底した不自由な空間へと改修されたりもする。

これまでの社会学では、この都市の「遊び空間」がどのような論理で変容を遂げてきたのかについてはほぼ考察がなされてこなかった。検討されるとしても、それは都市空間を設計する行政と住民との対立のローカルな社会運動の歴史であった。本研究で問題とするのは、私たち市民自身もまた、どこかで「遊び空間」が「機能空間」へと変容してい

く様を受容していたのではないか、という点である。その点に着目するとき、明治期以降の日本社会の近代化以降、とりわけ戦後復興が進んだ1960年代から1970年代以降の日本社会における都市空間に対する規範の形成とそのゆらぎの歴史を捉え直すことができるようになると思われる。

上記の点について積極的な研究成果をあげているのは、都市計画や建築学である。だが、それらの研究は概して、いかなる計画が「望ましいか」に焦点を当ててきた。それに対して、本研究で焦点を当てるのは、私たち市民がいかなる空間を「望ましい」と捉えてきたのか、である。それは、設計者側と市民の「望ましさ」をめぐる共振と齟齬の変遷を明らかにするものであり、それによって都市空間に対する社会的な「望ましさ」とは何かを理解することを目的とした。

以上の2点を本研究の研究開始当初の背景として要約できる。

2. 研究の目的

本研究では、都市の「遊び空間」がどのように受容され、消費されてきたのかという歴史を明らかにし、都市空間をめぐる論争が「子どものため」というレトリックに揺らがされながらも空間に対する規範に回収され、「子どものため」とは言いがたい空間が生み出されてきた要因を考察することを目的とする。この考察によって、特定の地域では、「子どものため」という種々の言説が齟齬をきたしたままに事態が進展し、論争を起こしつつも、全体社会としては社会問題として共有されにくい都市の「遊び空間」をめぐる現代的問題の構造的要因を把握し、より「望ましい」空間づくりを行なうための示唆を経験的に得ることを最終的な到達点として設定した。

先述の通り、本研究は研究代表者のこれまでの研究成果を発展的に応用するものである。そのため、都市の「遊び空間」を対象とする際、学校校庭に関する歴史社会学的分析から導かれた日本社会の「空間」・「子ども」へのまなざしの変容を参照軸とした。そこで、都市の「遊び空間」に関する歴史的資料や雑誌記事、新聞記事、書籍などの収集を行うこととした。その上で本研究では以下のような課題とその到達点を設定した。

(1) 本研究の目的に即した課題

「遊び空間」の受容とその歴史

学校校庭に投影される「子ども」へのまなざしと比較し、種々の資料を収集し、その内容分析を行い、都市の「遊び空間」が私たちにどのように受容され、消費されてきたのかを明らかにする。この研究を通して、都市と地方、時代ごとの「望ましい」空間、「望ましい」子どもといった理想像を明らかにするとともに、そこで「子どものため」というレ

トリックがどのように機能していたのかを理解する。

郊外都市を対象とした調査

これまで研究対象としてきた東京都・大阪府の学校校庭に対する活動の背景と比較するため、当該地域のみならず、大都市とは異なる郊外都市における「遊び空間」をめぐる論争の構図を捉える。

都市空間をめぐる規範の問い直し

以上の歴史的分析、現代社会の分析を踏まえ、都市空間をめぐる規範を問い直し、都市の「遊び空間」の設計段階、施行段階、完成後の利用段階における論争の構図を見だし、より「望ましい」空間づくりを可能とするための政策的提言を行なう。

(2) 本研究の到達目標

「子ども」をめぐる歴史社会学的研究は、「子ども」というカテゴリーがいかに語られるか(元森, 2009)、「子ども」の規律訓練と衛生思想の展開(宝月, 2010)など、「子ども」そのものと社会を考察するものであった。それに対して、本研究は、「子ども」という存在を語る「大人」を問題として設定した。そして、「子どものため」というレトリックに着目し、「遊び空間」の生成と消失とを許容してしまう私たち自身の反省を促し、「遊び空間」がいかなる意味で「子どものため」の空間であるのか、という教育社会学と都市社会学を架橋することを到達点として設定した。

本研究の帰結は、都市の「遊び空間」が「子どものため」というレトリックをまといながらも、行政の都市戦略や市民の快適な生活環境維持への欲求など、「大人の論理」にまみれた空間であることの描出とそこから得られる都市空間をめぐる規範の問い直しであった。このような点に対する研究が重要であると捉えた理由は、2011年3月の東日本大震災に伴う放射能汚染事故後には「子どものため」の「望ましい」空間の整備が求められる一方で、「子どものため」の保育園の庭での子どもの声が「騒音」とされるなど、「子ども」を語る私たちのまなざしは混迷を極めているためであった。

3. 研究の方法

本研究では、「2. 研究の目的」の(1)で記した課題を遂行するために、種々の方法を組み合わせることとした。

その第一は、学校校庭という空間を「教育」ではなく、「都市」空間として捉えるために、学校校庭に関する歴史的資料を収集し、分析することである。言い換えれば、歴史的資料の言説分析という方法を採用することとした。

第二は、現代社会の問題を考察するために、具体的な地域を設定し、質的調査もしくは量

的調査を行い、今この社会で何が求められているのかを検討することであった。

このような形で、歴史的な研究をすることは、最終的には現代社会の問題解決へと繋げていく視点を持ち、都市社会学、教育社会学、文化社会学の文献を渉猟し、研究動向の把握、方法論の検討を行っていくこととした。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、課題 に関して、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕、〔図書〕、課題 に関して、「5. 主な発表論文等」の〔学会発表〕、などで発表している。以下、それぞれについての研究成果の概要を説明する。

(1) 課題 に対する主な成果

本研究の主な成果の第一は、これまでに研究代表者が行ってきた研究を単著として公表した点に求められる。この成果の重要な点は、学校校庭という「教育」の空間を対象としながら、校庭と同様の機能が求められる都市の公園などに対して投げかけられる議論を参照軸としながら、時代ごとにどのような論争が起き、その結果として何が社会的な欲望として認められたのかを社会的背景と関係づけて明らかにした点である。すなわち、日本社会が近代化を目指した「整備」の時代(1900年代前後)、高度成長期の反省が求められた「改善」の時代(1970年代前後)、これまでとは異なる空間の「創出」が求められる時代(2000年代)という時代区分が、学校のみならず都市空間をめぐる論争とも重なりあいながら展開されてきたことを明らかにした点が本研究の成果の一つである。

(2) 課題 に対する主な成果

本研究の主な成果の第二は、上記(1)を前提としながら、実証的な研究に取り組んだ点に求められる。具体的には、埼玉県戸田市を対象として行った「子どもの居場所」に関する量的調査の結果を用いて展開した点である。その調査の結果、同一の市内においても、個人の置かれた状況、年代に応じて「望ましさ」が異なるばかりか、居住地区に応じて結果が大きく異なることが明らかになった。資料として残っている言説資料をもとにした歴史社会学的研究とは異なるアクチュアルな問題が浮き彫りになった。

(3) 今後の課題と展望

本研究の主な成果は、以上のようにまとめられる。しかし、課題、課題 に対する研究成果を接合させることはまだ残された課題である。

今後は、本研究の最終的な研究成果として、学術論文、図書の形でまとめあげ、公表していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

高久聡司・藤崎健一郎・奈良一樹, 校庭芝生化の持続的推進のための総合評価のあり方 応援する側の論理を考える, 芝草研究, 査読無, 43巻2号, 2015年3月, 195-200.

石井幹生・高久聡司, 校庭芝生化の到達点と課題, 芝草研究, 査読無, 42巻1号, 2013年10月, 61-64.

[学会発表](計3件)

高久聡司, 子どもの居場所等に関する研究～児童から生徒への転換期を中心として, 戸田市政策研究所シンポジウム, 2015年3月23日, 戸田市商工会館(埼玉県戸田市)

高久聡司, 校庭芝生化の持続的推進のための総合評価のあり方 応援する側の論理を考える, 日本芝草学会校庭芝生部会シンポジウム, 2014年8月31日, 東京大学(東京都文京区)

高久聡司, 戸田市における子育て支援活動に対する相互ニーズに関する研究, 戸田市政策研究所シンポジウム, 2014年3月14日, 戸田市商工会館(埼玉県戸田市)

[図書](計1件)

高久聡司, 勁草書房, 子どものいない校庭: 都市戦略にゆらぐ学校空間, 2014年1月, 総頁数219.

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高久 聡司 (TAKAKU, Satoshi)
目白大学・社会学部・専任講師
研究者番号: 60711439